〈社会主義リアリズム〉論争ノート Ⅱ
―陳企霞と第二次文代大会―

下出　鉄男

第二次文代大会の初日、郭沫若の開会の辞に続いて政治報告（「為総路線而奮闘的文芸工作者的任務」）に立った周恩来は、社会主義への過渡期における文学、芸術の基本任務を、「人民の生活の中の社会主義的要素の発展を促し、一歩一歩、社会主義の基礎を増大させ、強固にし、社会主義的改造の事業を完成させる」のを助け、その進展をより速めるために、人民、とりわけ青少年の共産主義にふさわしい道徳的品性を涵養することであると規定、「社会主義リアリズムを我々の文芸界の創作と批評の最高原則とすることは大変よいことである」と述べた。

周恩来の報告をうけて、二週間後の二四日、周揚があらためて「社会主義リアリズムを我々の全ての文学、芸術の最高原則とする」ことを確認し、更に大会開期中に召集された全国文協会員代表大会で、茅盾、邵荃麟がそれぞれ「新的現実和新的任務」「沿着社会主義現実主義的方向前進」と題する報告を行い、全ての作家が「しっかりと社会主義リアリズムを学習」し「マルクス・レーニン主義の優秀な学生」とならなければならない（茅盾）、「文学を更にしっかりと過渡期の総路線に服務させるために」、我々は「社会主義リアリズムの方法を用いて、更に多くの、一段とすぐれた、様々な形式の、人民の異なる文化水準に適合した作品を創造する」ことを要求されている（邵荃麟）、と発言した。

総じて言えば、ジダーノフ流の定義に基いて提起された〈社会主義リアリズム〉が、「更に多くの、一段とすぐれた作品を創造するには、党の政策・路線と離れていては不可能である。中央の指示した過渡期の総路線は、現段階の我国の社会発展の客観法則に基くものであり、それ故に我国の社会発展を指導する唯一の正確な道標である。文学工作者がこの総路線を離れるならば、それは現実生活の方向からはずれ、文学上のリアリズムからも離れることでもある」（邵）という言葉に端的に示されているように、極めて政策的な色彩の強いスローガンであったことは否定できない。ただ、そこに作家の側からの、創作上の問題を解決する糸口を掴もうとする意図が皆無だったとは言いきれない。受けとめ方の深浅はともかく、周揚、茅盾、邵荃麟が等しくとりあげた「公式化、概念化」の弊害の克服がそれである。

文代大会以前から秦兆陽らによって解放後の作品の悪しき傾向として俎上に乗せられていた、政策の条文にプロットや人物をあてはめて書かれた作品の「公式化、概念化」の問題を、三人のうちで最も深刻に受けとめていたと思われる茅盾は以下の如く述べている。

党の理論と政策は、我々の生活を観察、体験、分析、研究する指針にすぎず、政策の条文をもって生活にかえたり、文学上のリアリズムにかえることはできないのである

茅盾が提示している「公式化、概念化」克服の方法は、必ずしも満足のいくものではないが、彼が〈社会主義リアリズム〉をただ単に「過渡期の総路線」に応ずる政策的スローガンとしてだけでなく、文学・芸術の停滞を打開する創作上の方法論ととらえていたことは疑われない。しかし、茅盾を含め、〈英雄人物〉の創造という課題に集中的にあらわれた〈典型〉論の理論的混乱が、〈創作方法としての社会主義リアリズム〉に払拭しがたい制限をもうけることになったことも明らかである。

周揚は、人民の模範たりうる〈英雄人物〉の創造を文学・芸術の任務の中心に据え、次のように述べる。

ある人物に、英雄的な性格とはまったく相いれぬ政治上、道徳上の欠陥あるいは汚点 — 例えば、虚偽、利己主義、更に革命事業に対する動揺など — があれば、そもそも英雄人物とは見なせぬし、称賛、謳歌するに値するような価値は何もないのである。我々の作家は、英雄人物のまばゆい品性を突出させて表現するために、重要ではない彼の欠点を無視し、作品の中で大衆の憧憬する理想的人物にしたてあげることは、許されるし、必要なことでもあるのだ。

慎重な言いまわしながらも、茅盾も〈英雄人物〉の形象の意識的誇張を容認しているし、邵荃麟は、〈英雄人物〉の「非本質的な欠点」を無視できると、周揚の見解を繰り返している。後にやや詳しく検討するように、〈英雄人物〉創造に関する彼らの発言に内在する〈典型〉論の狭さが、〈社会主義リアリズム〉の党の政策への従属を深める要因になったように思われる。

周揚らの〈英雄人物〉論は、決して無条件に〈社会主義リアリズム〉の中心的な課題に置かれたのではなく、文代大会の準備段階において争点となり、陳企霞は根本的な疑問を表明していた。以下、文代大会の準備工作の経過を一瞥しておきたい。

一九五二年十二月、胡喬木が在京の文芸工作者に対して、〈社会主義リアリズム〉の原則を学習していかなければならないと述べたのに続いて、翌年一月、《人民日報》に周揚が《プラウダ》の求めに応じて執筆した「社会主義現実主義 — 中国文学前進的道路」が掲載された。因みに周揚論文と前後して《文芸報》に林默涵「胡風的反馬克思主義的文芸思想」何基芳「現実主義的路、還是反現実主義的路？」が掲載された。

三月、中華全国文学工作者協会協会常務委員会第六次拡大会議は「関於改組全国文協和加強領導文学創作的工作方案」を採択、年内に全国代表大会を開催し、「社会主義リアリズムの創作方法の学習と結合し、当面の文学の創作思想

等の問題を討論する」ことを決定し、常務委員会の下に全国創作委員会（主任・邵荃麟、副主任・沙汀）を設置した。創作委員会は、翌四月、北京で作家、批評家、幹部四十数名を組織し、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、毛沢東、マレンコフ、ジダーノフの関連論文、発言二十二種を必読文献に指定、六月までに十四回の討論会を重ね、〈社会主義リアリズム〉理論を学習した。

討論会は非公開であり、創作委員会が六月に創刊した《作家通訊》（内部発行）も見ることができないので詳細は明らかではないが、朱寨主編『中国当代文学思潮史』（一九八七年・人民文学出版社）の整理によると、討論の主要なテーマは、

Ⅰ　マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンのイデオロギーに関する学説及び文芸に対する指示に基き、リアリズムの発展を如何に認識するのか、
Ⅱ　〈典型〉と人物創造に関する問題、
Ⅲ　文学の党派性、人民性の問題、
Ⅳ　所謂〈無葛藤理論〉の克服など、当面の創作上の問題、

以上四点であった。

Ⅰについて、林默涵、陳涌が発言し、エンゲルスの「リアリズムというものは、私の考えでは、細目の真実のほかに、典型的環境のもとにおける典型的人物の再生産を含んでいます」（マーガレット・ハークネス宛書簡・マルクス＝エンゲルス『文学・芸術論』大月文庫、参照）という〈典型〉論に代表されるマルクス、エンゲルスのリアリズム理論は、〈社会主義リアリズム〉の基本原理をも包括するところの芸術の客観法則でると指摘した。また、旧来のリアリズム文学と〈社会主義リアリズム〉との本質的差異をめぐって、過去のリアリズムは理想を欠いていたために虚無主義に流れた、理想があったからこそ社会の暗黒を鋭く描きだしたが、歴史的条件と階級的立場に制約されたために明確な理想を示しえなかったのである、両者の本質的相違は、社会主義精神によって人民を教育するか否かにある、両者をわかつ指標は作家の階級的立場と世界観の相違である等々の意見が出された。マルクス、エンゲルスの文学に関する断片的な論評の解釈はひとまずおくとして、『中国当代文学思潮史』の叙述から窺いうる範囲で言えることは、a　新旧リアリズムの質的相違に対する認識は、ソヴェト作家同盟規約の〈社会主義リアリズム〉は「現実をその革命的発展において、真実に、歴史的具体性をもって描くことを芸術家に要求する。その際、芸術的描写の真実さと歴史的具体性とは、勤労者を社会主義の精神において思想的に改造し教育する課題と結びつかなければならない」という定義から演繹的に導かれたものにすぎないということ、b　胡風の〈主観戦闘精神〉に基く、作家の主体性に重きを置くリアリズム論を批判し、創作過程における世界観の主導性を強調した林默涵、何基芳の論文の見解にそう形で〈社会主義リアリズム〉が把握されたことである。大雑把に言えば、〈社会主義リアリズ

ム〉を旧来のリアリズムとわかつメルクマールは、マルクス主義の世界観及び社会主義精神の有無に求められたのである。文代大会では、「社会主義リアリズムの方向は、〈五四〉以来の中国の新文学の基本方向である」（邵荃麟）と、その淵源を文学革命、とりわけ魯迅にまで遡及する、恣意的としか言いようのない解釈がなされ、両者の質的相違が些か曖昧になっているようにも思われるが、こうした解釈自体は、五四運動以降をブルジョアジーではなく、プロレタリアートによって指導される新民主主義革命段階とする毛沢東の『新民主主義論』との理論的整合性を持たせる意図をもってなされており、従って新文学におけるマルクス主義的世界観、社会主義思想の指導性を強調するモチーフに貫かれているのである。こうした歴史主義が、魯迅をはじめとする新文学の主流はマルクス主義文芸思想だったという見取図に現代文学の実体を閉じこめ、非マルクス主義的な作家、文芸思潮に対する敵意に満ちた批判、あるいは極端な過小評価を生む原因の一つになったことは贅言を要しない。

『中国当代文学思潮史』に依れば、Ⅱのテーマをめぐる討論における陳企霞の発言は、〈典型〉の解釈、その創作方法への具体的な運用のあり方と関連して活発な議論を喚起したようである。

言うまでもなく、エンゲルスの提示した〈典型〉論を〈社会主義リアリズム〉の原理を包括する文学、芸術の客観法則と規定するだけでは、それが作品の創造過程に如何に位置づけられ、「美術的描写の真実さと歴史的具体性」を内在的に支えていくのかという作家の実践的な課題に対しては何も答えていないに等しい。たとえ政策的意図が先行していたとしても、〈社会主義リアリズム〉が社会主義文芸の創作方法としての可能性を拡大できるか否か、裏を返せば、硬直した教条に堕してしまうか否かという問題の鍵は、〈典型〉概念の理論的強化、その運用の如何にあったのである。

ソ連において、作家の創造性を束縛する絶対的規範として機能した〈社会主義リアリズム〉の弊害は、佐々木基一に依れば、〈典型〉概念の単純化、卑俗化に顕著にあらわれた。「社会主義リアリズムにおける典型概念が、理想概念として抽象化された事実を事実として認める必要がある」と指摘した後に続けて佐々木は次のように書いている。

> ソヴェトにおける意識的人間はすべてマルクス・レーニン主義の正しい世界観をもっており、現実のなかにある可能性をはっきりと見とおすことができる筈だから、未来をのぞきこむロマンチシズムと現実の必然を理解するリアリズムとの間には何らの矛盾も乖離もありえないし、もし何らかの逸脱や誤りがあるとしても、客観的には党は常に正しい道を歩むのだから部分的誤謬や欠陥は典型的ではありえない。こういう典型概念は一種の理想型を想定しなければ成立しないだろう。だが、現実の生活と現実の人間はすべて具体的であって完全無欠ではありえない。そこで、完全無欠な「かくあるべきもの」としての典型は、絶対化された党と、絶対化された党の指導者に集約されざるをえない。かくして、スターリンの神格化、スター

リン無謬論と典型概念は密接に結びつく。ソヴェトにおけるもっとも完全な典型は、すなわち党の指導者スターリンをおいてはないことになる。（中略）しかし、芸術作品の中に、いつもスターリンばかり描くわけにはゆかないから、普通人の典型を描かねばならぬが、それはただ理想概念としてのスターリンの鋳型にはめて作った小スターリン的タイプとして典型化さえざるをえない。（「社会主義リアリズムとは何か」　『リアリズムの探求』一九六七年・未来社・所収）

引用が長くなったが、ここに指摘されている〈典型〉論の陥穽は、創作委員会の討論でもⅣの当面の創作上の問題をめぐって論議されたと言われる〈無葛藤理論〉の発生源と密接にかかわっている。

陳企霞は、「典型的環境」の概念について、「歴史上最も重要な事件が最も典型的な環境である」が、「歴史の主要な矛盾の主要な側面だけが、本質的・典型的だと考えることは不正確であり、公式化の偏向を生みやすい」という見解を述べた。陳の発言は、五五年十二月、「典型的なものは所与の社会的、歴史的現象の本質に帰着され、それはリアリズム芸術における党派性が発現する基本的場であると規定され、また典型性の問題はつねに政治的な問題であって、芸術的形象の意識的な誇張によってのみ、その典型性をより完全に解明し、強調できるのだと断言」する、マレンコフ理論のスコラ的誤りを批判した《コミュニスト》掲載の論文「文学・芸術における典型の問題」（佐々木・前掲書参照）の問題提起を先取りしたものとして注目される。陳の指摘する「歴史の主要な矛盾の主要な側面」のみを典型的と見なす、単純化された〈典型〉概念が創作方法に機械的に持ちこまれる時、大小の矛盾の重層的な構造からなる社会生活の現実、あるいは強さと弱さ、高潔さと卑俗さをあわせ持ち、錯綜する思想、感情の陰影に彩られた個人の人間の複雑さは捨象され、〈典型的環境〉と〈典型的人物〉のいずれも、相反するただ二つのカテゴリー、即ち「革命」的なものと「反動」的なもの ── 換言すれば〈英雄人物〉と〈反面人物〉とに還元されるほかなくなる。こうした〈典型〉論の観点から見れば、〈英雄人物〉の欠点は、無視しうる「非本質的」なものとしてすらも存在しえないことにならざるをえない。茅盾が毛沢東の『文芸講話』における〈典型〉論を踏襲し、「我々は彼ら（英雄人物 ── 引用者）の生活の形象を実際の存在よりもいっそう強烈に、集中的に、理想的に、生き生きと、小説、映画、戯曲、詩歌の中で描写することによって、更に広く、有効に多くの労働人民を教育し、鼓舞しなければならない」と述べ、〈英雄人物〉の積極的側面を「意識的に誇張、突出させる」ことを主張していることからも窺えるように、「勤労者を社会主義の精神において思想的に改造し教育する」という目的意識が強く働きかければかける程、〈典型〉的なものは「所与の社会的歴史的現象の本質」にのみ収斂され、前述した周揚、邵荃麟の〈英雄人物〉の部分的な欠点は無視すべきであるという見解にまで、その概念は矮小化されたのである。陳企霞が〈典型的人物〉の形象化に横たわる問題に言及し、英雄（＝革命）的人物を描くことを創作の方

向とすることは誤りであり、「英雄人物を描く時、その欠点を書けているか否か」という問題提起のしかたも、品性・欠点といった言葉の意味を抽象化、固定化し、公式主義を招来する誤ったものだと指摘したことは、〈社会主義リアリズム〉の孕む理論的欠陥を見通した正当なものだったといえるだろう。

文学の党派性に関する厳文井の見解は、陳企霞の〈典型〉論の機械的把握に対して示した懸念とは対照的に、文代大会でしきりに強調された〈英雄人物〉の意識的誇張という考え方を醸成する土壌を用意するものであった。厳に依れば、党員作家にだけ党派性があるという考え方は誤りであり、党員であると非党員であるとにかかわらず、作家がプロレタリアートの立場に立ち、文学によってプロレタリアートに奉仕しさえすれば、その作品は党派性をそなえるが、党の政策を学習し、それに基いて行動しなければ、党派性は表現しえないとされる。

厳は、政策の図解でしかない作品を戒めているが、プロレタリアートの立場に立つ全ての作家が獲得しうるとされている党派性が直線的に政策に実体化されているとすれば、たとえ留保条件をいくつならべたとしても、〈典型〉の表現が、芸術的形象によって粉飾された政策の図解の域を踏みこえることはありえない。党派性は党の政策に最もよくあらわれるという観点からは、陳企霞の指摘が投じた問題の重要性は把握できない。弁証法的唯物論によって歴史の必然を認識するマルクス主義者から構成された党の政策にこそ社会の歴史的発展の本質は正確に反映されているという前提がなければ、人民の立場を党派性、更に党の政策と等号で結びつけることは不可能である。かかる前提が文学創造の場に持ちこまれれば、〈典型〉的なものは党以外には、せいぜい党の「正しい」政策に忠実に行動する人物の革命的行動、あるいはそれと対立する勢力の反動的本質としてしか表現できなくなり、日々の生活におわれ、無知と反動勢力の宣伝によって自分が歴史の主人公であることを認識できぬ民衆は、党の正しい指導、教育によって覚醒する受動的な存在としてしか意味がなくなる。また、それが文学史研究に適用されると、党の結成以来の文学作品を社会主義的なものと非社会主義的なものとの間に絶対的な境界を設け、前者のみが客観的な歴史法則に適合した本質的なものと見なされ、既に示唆した如く、後者は社会主義の対立物としてのみ評価されるのである。

文代大会で周揚、茅盾、邵荃麟が〈典型〉の創造を〈英雄人物〉の意識的誇張とまで言いきったことは、創作委員会の討論会における陳企霞の問題提起がその理論形式の過程で吟味されないまま押し流されたことを物語っているが、陳の示した概念は、〈社会主義リアリズム〉の〈典型〉論の矮小化の根底にある、マルクス主義の世界観の学習、獲得こそが文学創作の絶対要件とする観点を批判した胡風「意見書」、何直論文によって理論的に深化されたと言えるだろう。